

三重県 心のノート

中 学 校

三重県教育委員会

みなさんへ

みなさんは、社会の宝、生まれながらにしてかけがえのない存在であり、一人ひとりが「大いなる可能性」をもっています。変化の激しいこれからの社会の中で、自らの可能性の実現に向けてたゆまぬ努力を重ね、豊かな人生を築くとともに、よりよい社会づくりに貢献できる人になってください。

そのためには、自らの夢の実現をめざし、主体的に学び、困難を乗り越え、自信と意欲をもって輝く未来をきりひらいていく力（自立する力）を身につけることが大切です。

また、一人ひとりの違いを認め合い、お互いを尊重し、豊かな人間関係を築くとともに、命を大切に作る心、人に対する感謝や思いやり、善悪の判断などの規範意識、郷土に対する誇りや愛情などをもち、ともに支え合い生きていく未来づくりに貢献する力（共に生きる力）を身につけることも大切です。

このような期待をこめて、道徳の時間をはじめとし、各教科の学習や学校生活全体の中で、また、家庭においても活用できる道徳学習用の教材として、「三重県 心のノート」を作成しました。

教材の内容については、三重県の郷土学習用の教材「三重の文化（郷土の文化編）」から、さまざまな分野の発展に尽くした人物や、自然、伝統と文化をテーマとして取り上げました。みなさんが郷土のことを詳しく知り、郷土への誇りをもつとともに、先人の生き方や豊かな自然、すばらしい伝統と文化について学ぶ中で、自分の生活や体験を振り返り、毎日の生活を見つめ直し、これからの行動や生き方について考えることができるように作成しています。

みなさんが、学校や家庭、地域での学習や生活の中で、「三重県 心のノート」を積極的に活用することを通して、自分の生き方について考えを深め、自ら道徳性をはぐくみ、これからの社会をたくましく生き抜いてくれることを期待しています。

平成 26 年 3 月

三重県教育委員会

もくじ

い せ わんたいふう 伊勢湾台風	1
災害を乗り越えて ふるさとの今がある	
いな ば さん え もん 稲葉三右衛門	5
今、苦心しようとも ふるさとの未来のために	
たにがわことすが 谷川土清	9
一生をかけた研究 その成果は今も生き続ける	
おおよど ギ おんまつり 大淀の祇園祭	13
守られてきた伝統 守っていくのは私たち	
お ざ き ゆ き お がく どう 尾崎行雄 (穹堂)	17
理想を求め 民衆とともに信念を貫く	
かわむらずいけん 河村瑞賢	21
個人の幸せだけでなく 社会全体の幸福を求めて	
おお せ とう さ く 大瀬東作	25
郷土のために そして、日本全国のために	
地震の後の津波	29
郷土の子どもたち あなたたちは、まちの宝	



三重県

心の ノート

中学校

災害を乗り越えて ふるさとの今がある

伊勢湾台風

「伊勢湾台風」は上陸時、日本では史上3番目に気圧が低い929.2hpa（ヘクトパスカル）を観測した超大型の台風で、室戸台風、枕崎台風と並ぶ昭和の3大台風といわれています。

1959（昭和34）年9月26日の夜に上陸した「伊勢湾台風」による高潮のため、木曾岬村（当時）の南半分の堤防は寸断され、死者328名、家屋流出171戸、全壊95戸などの今まで経験したことのない大きな被害を受けました。木曾岬町内には、現在もたくさんの慰霊碑が残っています。

台風によって学校も損傷を受け、12月に仮復旧するまでの間、小中学生は三重県鈴鹿市内の鈴峰荘という施設で、教師とともに寄宿生活を送りながら勉強しました。親と離れての生活はとても寂しいものだったそうです。

被害からの復旧のために、たくさんの人々が天秤棒を担いだり、トロツコを押したりして、作業をしました。しかし、台風による塩害で、その後何年も田畑が不作となるなどたくさんの苦労がありました。



当時の伊勢湾台風の様子（木曾岬町提供）

学習のめあて

伊勢湾台風は、私たちの郷土三重県を襲った未曾有の自然災害です。この台風は、発生から上陸までの期間が6日間と短く、発達したまま上陸しました。暴風圏が非常に広く、東西に伸びた停滞前線が刺激され大雨をもたらしました。また、上陸後も強い勢力を維持したことによる風の被害や、さらには伊勢湾に高潮を発生させる最悪のコースを通ったことも重なって、被害が一層大きくなりました。

今までに例のない大きな被害をもたらすことになった伊勢湾台風の被害の甚大さや、復旧へ向けた人々の苦労の様子、そして、郷土の人々が多くの尊い生命や貴重な財産を失った悲しみや絶望を乗り越えて、どのような思いで今日の暮らしの礎を築いたかなどについて考えてみましょう。

考えてみよう

- 1 伊勢湾台風はどのような被害をもたらしたのでしょうか。
- 2 当時の写真、被災された方々の話や作文等から、どのようなことを感じましたか。
- 3 伊勢湾台風の後、人々はどのような思いで復旧工事にあたったのでしょうか。
- 4 切れた堤防を締め切る工事を、一ヶ月もかからずに終えることができたのは、なぜでしょうか。
- 5 悲しみや絶望を乗り越え、郷土を復興させた人々の姿から学んだことを話し合いましょう。
- 6 三重県を襲ったその他の災害について調べ、その当時の体験をもつ家族や地域の方々に話を聞いてみましょう。

伊勢湾台風を体験した人の話

私の家は台風までは本当に幸せな家庭でした。7つの女の子と7ヶ月の男の子と私と主人と65歳のおじいちゃんとおばあちゃんが61歳でした。…略…（伊勢湾台風が上陸した）26日の朝はすごく雨が降っていきまして、私たちはお父さん（おじいちゃん）と田んぼの稲をあげたりして始末していましたが、主人は消防で朝からいけません。…略…「外はちょっと明るいけど」と言って戸締りをしました。そしたら「6時頃に夕飯を食べよう。えらなるで」と言って、私は7つの子を負^おんでおばあちゃんは7ヶ月の男の子を、そしておじいちゃんは畳^{たたみ}をあげておりましたけども、6時半頃になったらダバダバと畳がいうようになって、お父さん（おじいちゃん）は「こんな大きな家が倒れたら、木曾岬^{きそさきじょう}中の家がないぞ」と言われました。

それで避難^{ひなん}することなんかちっとも考えておらず、そしたらそのうちに畳が浮くもんで、おばあちゃんは「2階に上がれ」と言われて私も上がっていきました。そしたら、おじいちゃんが「俺は仏さんを取りに行く」と言って、そんで私たちは携帯ラジオ^{けいたい}とろうそくをもって上がりました。

間もなくするとおじいちゃんが「俺は死んだぞー」と言ったので、おばあちゃんが「死んだんー？」って言ったんです。その時はまだ8時には、なってませんでした。7時40分頃でしたかね。「ガタッ」という音がしたと思ったら私たちはもう海の中でした。その時、おばあちゃんが「おーい、ここは海だぞー。海だぞー。」って言うのだけど、そのうち大きな波がザザーっとやってきておばあちゃんは「ゆきさーん、ゆきさーん」と言ってそのまま亡くなったというか、沈んでいったんです。…略…そのうち大きな波が来てザバーっと頭の上にかぶって、それを2、3回繰り返しました。そしたら負^おんでいた子がいなくなったので「けい子ー、けい子ー」と叫びましたが、声も何にもなく、…略…そのうちに大きな流木^{りゅうぼく}が「ガン！」と当たりました。それで気を失っていました。

…略…私たちは私と主人だけになりましたけど、今思うとあんな怖いことはなかなか忘れることはできません。そして、子どもとも別れ、お舅^{しゅうと}さん（おじいちゃん）たちとも別れ、本当に泣くだけが私の仕事でした。

被災直後の小学生代表の作文

『台風の翌日』

【小学校6年 女子】

…略…父母を見ているとかなしくなって庭へ出ようと思ったが、流木でうずまっていた。母が、「とうちゃん、情けのうなってきたな。」と言われた。父はだまっていて仕事にも手がつかなかったらしい。母は手で顔をおおってただ子供のように泣いておられるばかり、私はそんな父母を見るのが何よりも一番つらく思えた。庭に流れてきた流木をかたづけなければいけないと思うと、生きているのがいやになってきた。さかなの死んだのやら、人間の死んだのが、私達のこまっているのを見てなぜかわらっているようなきがした。

- 限りあるたったひとつの生命だから
- 郷土をもっと好きになろう

『ひなん所での生活』

【小学校4年 女子】

台風があつてちょうど一週間たちました。ある日、よその村へひなんすることになりました。私はいきなくなつたけれど、勉強におくれるからしかたがなく行つた所が、どこだかわかりません。それはひろいお寺でした。バスガールさんが、「ここは高田本山たかだほんざんですよ。」とおしえてくださいました。おばあさんたちは、「なん日ぶりか、ほとけさまをおがむのは。」と、なみだをだしてよろこびました。…略…うれしい毎日、悲しい毎日をすごして、お寺となれたころは、2週間たつたころでした。その日、はんちょうさんが、「ここではなにかとふじゅうですから、鈴峰莊れいほうそうにうつります。そこではめんかいができません。」とおしえてくださいました。おばあさんとはなれるのはいやです。父、母とわかれているのもいやですが、どうしようもありません。その夜は、とてもかなしくて、ねようともしませんでした。

復旧のようすについて（国土交通省の方の話）

…略…まず、切れた堤防を締め切るし工事を始めた。10月8日から工事にかかり、順番に締め切り、…略…終わったのが11月9日。水浸しびたになり、人が大勢亡くなり、それだけでなく家も壊れ、田畑もなくなり、人が住める状況ではなくなった。…略…当時のお父さん、お母さんは、早く堤防を締め切って元の状態にもどりたい、別に住んでいる子どもと一緒に住めるようにしたいというものすごく強い気持ちがあった。…略…国や県、町が一生懸命がんばって締め切り工事をやった。そのため一ヶ月もかからない間に、締め切り工事を終わることができた。…略…



海岸堤防復旧工事のようす（当時撮影）

出典：「伊勢湾台風から50年 昭和34年9月26日（1959年）」（木曾岬町、木曾岬町教育委員会）

今、苦心しようともふるさと未来のために

いなばさん えもん 稲葉三右衛門

稲葉三右衛門は、江戸時代末から明治時代初期に、港の維持と修築に苦心をし、四日市港が発展するきっかけをつくりました。

古くからあった港は、江戸時代の末の「安政の大地震」(1854年)で被害を受け、次第に船の出入りができないようになってきました。それでも1870(明治3)年には、四日市-東京の定期航路ができ、蒸気船が来るようになりました。それを見た稲葉三右衛門は、これからは蒸気船の時代になる、四日市の発展のために

大きな船が出入りできる港にしたいと考えました。そこで、新たに運河を掘って海を埋め立てて、築港工事をしようと計画したのです。

1873年に県から許可があり、同年には自分の土地から工事を始めました。1874年に埋め立て地と運河はできあがったものの、資金がなくなり工事を中断しました。1875年に県が工事を引き継ぎましたが、これも中断しました。この間、三右衛門は資金調達に苦心しつつ工事の継続を願い出て、やっと1881年に認められ、1884年に工事は完了しました。



肖像画(四日市市立博物館提供)

学習のめあて

稲葉三右衛門は、莫大な資金を必要とした四日市港の築港工事を、自らの金を使って行いました。三右衛門は、四日市の発展のために大切なのは港であると考え、大きな船が出入りできる港にして、日本中の港と品物のやりとりができることを願いました。そのためには、大がかりな工事が必要でした。

熱心に港づくりをする三右衛門を見て、まわりの人たちの中には、「自分の土地のねだんを上げて、金もうけするつもりだ」などと言う人もいたそうですが、三右衛門は、「今十万金を投じるのは、後の日の四日市に百万金をもたらさんがため」という言葉を残し、全財産を使い果たしたうえに、多額の負債を抱えたと言われています。

資金調達に苦心しながらも工事を継続しようとした三右衛門の生き方に、どのような感想をもちましたか。当時の三右衛門の心情に迫り、三右衛門の残した業績の価値だけでなく、一人の人間としての生き方に焦点をあてて考えてみましょう。

考えてみよう

- 1 江戸時代の末の四日市は、どんな様子だったのでしょうか。
- 2 稲葉三右衛門は、どんな事業を行ったのでしょうか。
- 3 稲葉三右衛門が、苦心して四日市港の工事をしようとしたのはなぜでしょうか。
- 4 たくさんのお金を使った稲葉三右衛門は、後悔しなかったのでしょうか。
- 5 郷土の発展に尽くした稲葉三右衛門の生き方について考え、話し合みましょう。
- 6 自分たちの住む地域の発展に努めた人物について、調べてみましょう。

稲葉三右衛門の港づくり

稲葉三右衛門は、四日市^{よっかいち}の発展のために大切なのは港であると考え、大きな船が出入りできる港にして、日本中の港と品物のやりとりができることを願いました。そのためには、大がかりな工事が必要でした。

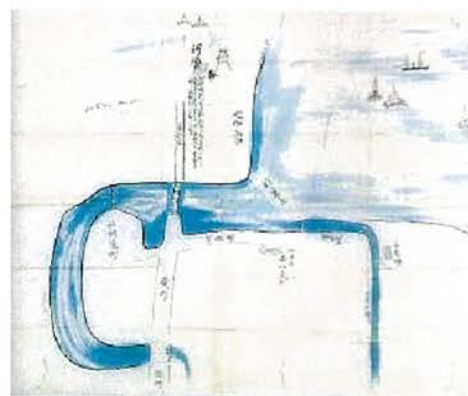
1872（明治5）年、三右衛門は、県に港の工事の願いを出し、許しが出たので自らのお金を使って工事を始めました。

100年以上も前の工事は、今のようないな機械がありませんでした。簡単な道具を使って人の力だけで進められたのです。三右衛門は、工事をしている港に行き、働く人々を励ましたそうです。

熱心に港づくりをする三右衛門を見て、まわりの人たちの中には、「自分の土地の値段を上げて、金もうけするつもりだ」などと言う人もいたそうです。

たくさんのお金を使った三右衛門は、自分の生活にもこまるようになり、工事は続けられなくなりました。そこで、三重県がかわって工事をしましたが、中止されました。三右衛門は、苦労してお金を集めたり、工事の願いを何度も出したりしました。

工事費用の計画をかえることで、ようやく国や県から、工事をする事がみとめられ、1884（明治17）年、ついに港の工事が終わりました。^{はとば うめたち}波止場や埋立地、運河、橋などがつくられました。こうして、四日市港（旧港）は使いやすくなり、港がさかんになるもととなりました。



工事前の四日市港（一部分）
（四日市市立博物館提供）

港づくりに使われた道具



てんぴんぼう
両はしにもっこを
かけて運ぶ



足踏み水車
ていぼうの中の水を
外へくみ出す

もっこ
なわをあんで、
石やすなを運ぶ



じょれん
小石やすなを
かきよせる

- 私たちの力を社会の力に
- 郷土をもっと好きになろう

稲葉三右衛門と四日市港の工事の年譜

年 代	お も な で き ご と
1854（安政元）年	・ 6月と11月に大きな地震があり、港が壊れる。 ・ 1863年に大きな修理をする。
1870（明治3）年	・ 船の会社ができ、蒸気船が四日市と東京^{とうきょう}を行き来するようになる。
1872（明治5）年	・ 三右衛門が、港の工事をする願いを三重県に出す。
1873（明治6）年	・ 三重県の許しが出たので、三右衛門は、自分の土地から工事を始める。 ・ 協力していた田中武右衛門^{たなかぶ えもん}が工事の仕事をやめる。
1874（明治7）年	・ 三右衛門は、資金がなくなり、工事を中断する（埋立地^{うめたてち}や運河などはできあがる）。
1875（明治8）年	・ 三重県が工事を引きつぐ。 ・ 埋立地が「稲葉町^{いなば}」、「高砂町^{たかさご}」と名づけられる。 ・ 三右衛門が、三重県に工事を続ける願いを出す、費用で意見が合わず認められない。 ・ 汽船会社が、四日市と東京の定期航路をはじめる。
1876（明治9）年	・ 三右衛門が、港の工事を続ける訴え^{うった}を裁判所におこす。 ・ 地租改正^{ちそかいせい}反対一揆^{いっき}が起こり、港が焼かれ、県の工事は中断する。
1878（明治11）年	・ 裁判所は、三右衛門が工事を続けることを認めない。
1881（明治14）年	・ 三右衛門が、国に港の工事を願い出る。 ・ ふたたび、国や県は工事を認める。
1884（明治17）年	・ 四日市港の工事が完成する。

（注）このころは、県や国にはお金がなく、自分でお金を出して工事をするのが進められていました。

「のびゆく四日市」（四日市市教育委員会）から作成

- 目標に向かうくじけない心を大切にしたい
- 郷土をもっと好きになろう

一生をかけた研究 その成果は今も生き続ける

たにがわことすが
谷川士清

谷川士清（1709～1776）は江戸時代中期の国学者で、同じ国学者で松阪出身の本居宣長より20歳年上にあたります。「恒徳堂」とよばれた医院の長男として生まれ、医者のかたわら「洞津谷川塾」や「森蔭社」とよばれた塾や道場を開いて門人に学問を教えました。



谷川士清（津市教育委員会提供）

彼の研究の一つに『日本書紀』の研究があり、注釈書である『日本書紀通証』を著しました。その第1巻の付録に『倭語通音』といわれる動詞の活用表を著しています。また多くの書物の研究を続ける中で、言葉を50音順に整理し、日本初の本格的な国語辞典である『和訓栞』全93巻を編集しました。方言や外来語まで含むほど語彙が多く、出典や用例も多く載せられ、現代の国語辞典のもとになった本でした。

旧宅と墓が国の史跡に指定されていて、旧宅は津と伊賀上野を結ぶ伊賀街道沿いの八町にあり、当時は街道沿いに商店が建ち並んでいました。1775（安永4）年銘の瓦が残っていて、その頃建て直されたか、新築されたものと思われます。



『和訓栞』版本と自筆稿文
（石水博物館提供）

学習のめあて

谷川士清は、本居宣長、橋守部とともに三重を代表する国学者の一人です。士清は、町医を営む家に生まれ、幼い頃から家業を継ぐため勉学に励み、21歳の頃からおよそ5年間京都で医学を学びました。京都から帰郷した士清は医者となり、地域・近郊の人々の信頼を受けました。さらに、医業のかたわら学問にもうちこみ、二十数年間にわたって『日本書紀』の研究に熱心に取り組みました。『倭語通音』や『和訓栞』は、日本のみならず海外の多くの人たちに影響を与え、日本語や日本を理解するために大きな役割を果たしました。

また、士清が亡くなってから110年後に、士清の子孫の人たちが財産をなげうって、『和訓栞』を完成させました。

士清の長年にわたる努力の成果について話し合しましょう。また、士清の子孫の人たちは、なぜ士清の取り組んだ研究を引き継ごうとしたのでしょうか。士清とその子孫の人たちが、困難な目標に向かって努力した生き方について考えてみましょう。

考えてみよう

- 1 谷川士清は、どのような研究をしたのでしょうか。
- 2 谷川士清の研究は、いろいろな人に役立つものとなりました。それはどのようにいかされたのでしょうか。
- 3 長年取り組んできた『和訓栞』を本にする前に、病気で亡くなった谷川士清は、どんな気持ちだったのでしょうか。
- 4 谷川士清の死後、『和訓栞』はどうなったのでしょうか。
- 5 谷川士清の思いを、その子孫の人たちはどのように考えていたのでしょうか。
- 6 一生をかけて研究を続けた谷川士清の生き方について考え、話し合しましょう。
- 7 伝統や先人から引き継いできたもので、これからも大切にしたいものや誇れるものに何があるか調べてみましょう。

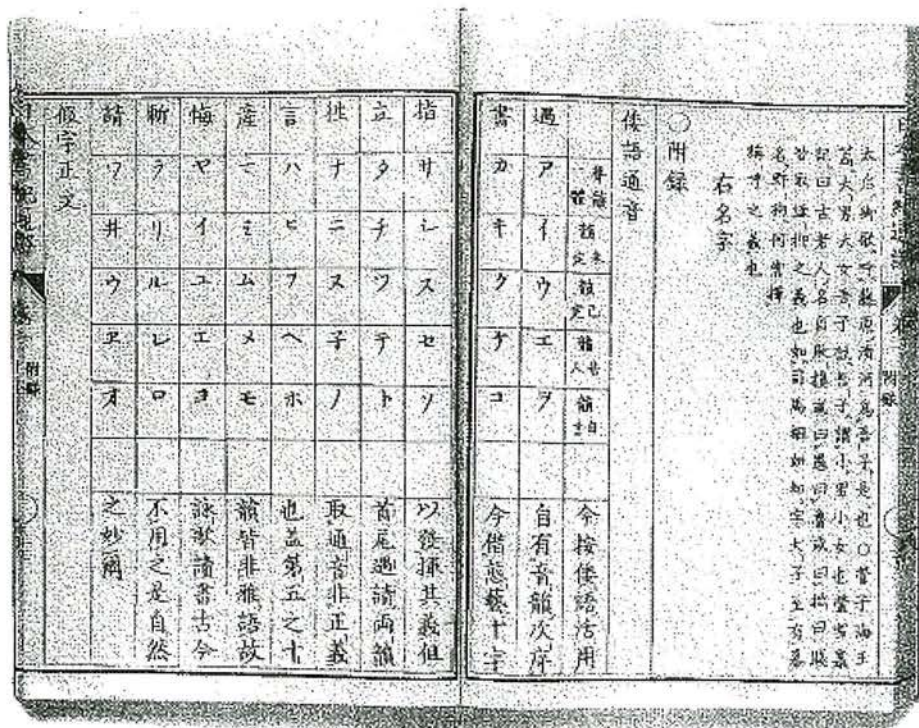
士清さんの学問と研究

京都から帰った士清さんは、「養順」という号をつけて町医者をしてながら、国学の研究にはげみました。また、自宅で「洞津谷川塾」を開いて、たくさんの人を教えました。

国学というのは、日本の古い書物を通じ、古くからの日本人の考え方などを研究するもので、松阪の本居宣長さんがよく知られています。士清さんは宣長さんよりも20歳ほど年上で、国学研究では宣長さんの先輩にあたります。

士清さんの国学の研究のひとつが、古い時代の日本の国の歴史の本『日本書紀』をわかりやすくするために説明を加えることでした。この研究は、二十数年間も続けられ、のちに『日本書紀通証』(全35巻)としてまとめられました。これは大変な努力のいる研究で、学者としての士清さんの名を高めました。

さらに、その中の第1巻付録である『倭語通音』は、わが国最初の「動詞活用表」となりました。これを読んで感心した宣長さんは士清さんに手紙を出し、ふたりの間に学問の交流がはじまりました。



倭語通音

- 目標に向かうくじけない心を大切にしたい
- 郷土をもっと好きになろう

土清^{ことすが}さんは日本語を研究する中で、言葉を一つひとつのカードに書き、その意味や使い方を詳しく記入していきました。こうして集まった約2万1千にも及ぶ言葉を整理して、辞書を作りました。これが有名な『和訓栞^{わくんのしおり}』で、全93巻にまとめられています。この辞書はわが国最初の本格的な五十音順（あいうえお順）の国語辞典で、のちに日本語を勉強する人たちによって、大変参考になりました。

土清さんは、長年にわたって『和訓栞』の準備をし、全部を書き終えていよいよ本にしようとりかかったとき、病気のために亡くなってしまいました。1776（安永^{あんえい}5）年10月10日のことでした。

その後、『和訓栞』は、土清さんの遺志^{いし}をついだ子孫の人々が本にしました。完成したのは1887（明治20）年で、土清さんが亡くなってから110年後のことでした。その頃は今のようない印刷機械がなく、大変な時間とお金がかかりました。谷川家の人たちは、家の財産をなげうって『和訓栞』を完成させたのです。

苦勞の末に完成した『和訓栞』は、外国の人が日本語を勉強するときにも役立ちました。江戸時代の終わり頃、長崎にいた医師シーボルトが帰国する時に、幕府の許可を得て持ち帰った5種類の辞書のうち、後にオランダ人学者のホフマンにより、『和訓栞』だけが『日本文典^{にほんぶんでん}』に取り上げられました。

出典：パンフレット「日本ではじめて五十音順の国語辞典をつくった谷川土清」
（2009 谷川土清生誕300年記念事業）

守られてきた伝統

おおよど ぎ おんまつり 大淀の祇園祭

大淀の祇園祭は、『伊勢物語』の主人公在原業平と斎王の物語の舞台にもなった明和町の大淀で行われています。祇園祭は各地にあります。大淀では、旧暦の6月14日に近い土曜日に行われます。大淀の3地区から山車がひきだされ、宵宮の東区の山車を皮切りに当日は三世古、山大淀の山車が区内を練り歩きます。夕刻には2隻をつないだ漁船の上に、三世古の山車を乗せて大淀港に浮かべる海上渡御が行われます。夜には三世古内にある三つの区が毎年輪番で担当する花火大会があり、中でも仕掛花火の点火方法は、長年の間にそれぞれの区の秘伝となっています。

近年、約半世紀ぶりに神輿が再建され、小中学生が中心になって大淀のそれぞれの区を練り歩いています。



祇園祭（明和町教育委員会提供）

守っていくのは私たち

学習のめあて

大淀の祇園祭は、江戸時代から250年以上受け継がれている伝統行事です。京都の八坂神社、愛知の津島神社の流れをくむものと言われており、氏子の安全と農業・漁業の発展を祈って、毎年旧暦の6月14日に近い土曜日に行われています。

大淀の祇園祭は、3地区の祭が複合したものです。各地区から山車が出て、区内を練り歩き、それぞれに特色をもった行事が行われています。例えば、三世古では、大淀港の満潮時に合わせて、幟や提灯で飾られた「なりひら」、「ゆきひら」と名づけられた2隻の船に山車を乗せる、海上渡御とよばれる儀式が行われます。また、夜には花火大会が催され、打ち上げ花火と仕掛花火が水面を彩ります。

祭で、太鼓や笛、鉦などを担当するのは、地区の若者たちです。連日練習を重ねて祭に臨み、雰囲気の大いに盛り上げます。近年、地域住民が、より一体感をもてるような祭にしようと、半世紀程前に火災で失われていた神輿が再建されました。そして、この神輿を担ぐのは子どもたちです。

時代を超えて、脈々と受け継がれてきたふるさとの伝統や文化。様々な困難を克服しながら、それらを守り続け、育んできた郷土の人々の気持ちを考えてみましょう。そして、自分が暮らす地域を見つめ直してみましょう。

考えてみよう

- 1 大淀の祇園祭とは、どのようなものでしょうか。
- 2 この祭が今日まで引き継がれているのは、人々にどんな思いがあったからでしょうか。
- 3 半世紀ぶりに神輿が再建されたのは、どうしてでしょうか。
- 4 再建された神輿が、子どもたちの手によって担がれている理由を考えてみましょう。
- 5 ふるさとの伝統や文化を守ることの意味や課題について考え、話し合ってみましょう。
- 6 自分たちの地域に伝わる祭の起源を調べてみましょう。また、祭に携わっている人々の願いを聞いてみましょう。



かいじょうとぎょ
 海上渡御 (明和町提供)

だし
 山車が、「なりひら」「ゆきひら」の2隻の船に乗せられます。

参考 祇園祭とは

祇園祭は、平安時代前期の869（貞観11）年、全国に疫病が流行したため、当時の国の数にちなんだ66本の鉾を立て、旧暦の6月14日に、神輿を京都の神泉苑に入れ、災難が取り除かれるよう祈ったことがその起源だと伝えられています。

祇園祭は、厄よけの祭礼行事であったことなどから、京都以外にも広く伝わりました。今でも全国各地に「祇園祭」という名称をもつ祭が行われており、山車や神輿が町を練り歩くものが多いです。

大淀の祇園祭は、江戸時代の中期に、疫病を払い氏子安全、農業・漁業の発展を祈る民間信仰から始められ、京都の八坂神社、愛知の津島神社の流れをくむものだと言われています。

めい わ ちょう 明和町中央公民館 はまぐち 濱口館長さんの話

おおよど 大淀地区に伝わる ぎ おんまつり 祇園祭は、約 260 年の歴史を誇っています。祭は、人、地域、伝統など多くの要素が支え合って行われてきました。

近年、大淀に建つ住宅は、旧集落内にとどまらず、周辺地域へと広がってきました。そこで、地域住民が、より一体感をもてるような祭にできないか検討され、神輿が再建されることになりました。以前、祇園祭では山車をひく前に神輿を担いでいたのですが、その神輿は火災で焼失していたのです。

2001（平成 13）年に、新しい神輿ができあがりました。そして、この神輿は、大淀だけに限らず、町内の子どもたちによって担がれることになりました。神輿を担ぐことをとおして、祭の楽しさや喜びを感じるとともに、祇園祭以外の地域行事に参加する子どもたちが増えてきています。子どもたちの力が、伝統行事を守り育てていくことを願っています。



子ども神輿（明和町提供）

理想を求め 民衆とともに信念を貫く

お ぎき ゆき お
尾崎行雄 (号堂)

尾崎行雄(号堂)は衆議院名誉議員で「憲政の神様」「議会政治の父」とよばれています。神奈川県で生まれ、1872(明治5)年に三重県伊勢市に引っ越し、宮崎文庫英学校に入学しました。

1882(明治15)年大隈重信の立憲改進黨の創立に参加し、1890(明治23)年第1回総選挙で三重県選挙区より出馬し当選。以後63年間に25回連続当選し、司法大臣や文部大臣の役職を務めました。また、桂太郎首相を糾弾する演説を行って第一次護憲運動の中心となりました。

第一次世界大戦後のヨーロッパで戦争の悲惨さを見聞して以後は、一貫した軍縮論者となり、大正デモクラシーの進展とともに普通選挙運動を支持しました。

戦後の国会でも活躍して、民主主義の復活と世界平和の確立のために力を尽くしました。31歳から94歳まで、衆議院議員として活躍し、政界を引退しました。

伊勢市に尾崎号堂記念館があります。また、国会前庭の敷地内にある憲政記念館は、尾崎の功績を称えて建設されたものであり、銅像も建てられています。



尾崎号堂記念館 (伊勢志摩きらり千選提供)

※号堂は、本名ではなく、雅号です。

(雅号とは、文筆家、画家、学者などが本名以外につける風雅な名のことです。)

学習のめあて

尾崎行雄は、「憲政の神様」と呼ばれた政治家です。憲政とは、憲法にもとづく政治のことです。1912(大正元)年に当時の桂太郎内閣が国会を無視する態度をとったとして、憲法にもとづく政治を守ろうとする運動がおこりますが、この時、尾崎は国会で桂首相の責任を問い詰める演説を行っています(このあと桂内閣は退陣におこまれました)。また、国際平和を目指した政治家としても知られています。軍縮(軍備縮小)を求め、軍備拡張を求める軍部と対立して激しい妨害行為を受けますが、国民の意向を政治に反映させようと、普通選挙の実現にも力を入れて取り組みました。昭和になってからも、軍部を批判する演説をしましたが、このときは、懷に辞世の句をもっていたと言われています。このような尾崎を25回連続して国会に送ったのは、三重の選挙区民でした。時には自費で選挙運動を行い、また、戦時中、大政翼賛会に反発して孤立した尾崎に対しても、変わらず支持を続けました。

当時の三重県の選挙区民の人々は、どのような気持ちで尾崎を支えたのでしょうか。理想を求め民衆とともに信念を貫き、日本の民主政治の確立に大きな足跡を残した尾崎の生涯について考えてみましょう。

考えてみよう

- 1 尾崎行雄が議員を務めた63年間に、国内外ではどのような出来事が起きたのでしょうか。
- 2 尾崎行雄が、軍縮論者になったのはなぜでしょうか。
- 3 尾崎行雄は、どのような考えをもって、普通選挙を実現させようとしたのでしょうか。
- 4 三重の選挙区民は、どのような気持ちで尾崎行雄を支え、連続25回の当選に導いたのでしょうか。
- 5 理想を求め民衆とともに信念を貫いた尾崎行雄の生き方について考え、話し合ひましょう。
- 6 真実や理想を求めて努力し、自分たちの住む地域に尽くそうとした人物について調べ、まとめてみましょう。

普通選挙の先頭に

1918 (大正7) 年に終結した第一次世界大戦後の世界は、思想的な大転換期^{だいてんかん き}でした。民主政治の必要性や民主思想がますます強くなる反面、階級闘争^{かいきゅうとうそう} (支配階級と被支配階級の闘争) が叫ばれ、資本家と労働者の対立も険しくなってきました。

戦後の世界はどうなるだろうか。日本はどのような立場にあるべきなのか。尾崎行雄は、大戦後の欧米旅行に出発しました。まず、アメリカに行き、その後イギリスに渡りました。実際に行って、欧米の思想の変化を直に感じました。最も衝撃を受けたのはフランスやベルギーで見た大戦の傷跡^{きずあと}でした。戦争による破壊はすさまじいものでした。残骸はまるで鉄や銅でできた大きな鉱山^{てんべん ち い}のようで、天変地異が起こってもこれだけの破壊はできないと感じたほどでした。「戦争は国家のためといいながら、結局、その国家や人類を滅ぼすものとなっている。このような大破壊を行う人類というのは、なんと愚かなものなのか」と思わずにはいられませんでした。尾崎は「帰国したら、軍備制限と国際平和のために力をつくそう」と決心したのでした。

欧州視察後の尾崎の政治目標は、この軍縮 (軍備縮小) と普選 (普通選挙) でした。

1919 (大正8) 年12月、日本に着いてみると、国内では物価が高騰して生活を圧迫し、労使の対立が激しさを増していました。不満を持った労働者の中には、議会政治を否定して、暴力的な直接行動^{うった}に訴える者もいました。この状況を打開するには、議会が民意を反映する場となるために、「普通選挙を実現するより他はない」と考えるようになりました。尾崎はこう決心すると、普選運動の先頭に立ちました。東京の両国での普通選挙促進大会では5万人もの大衆が集まり、芝浦や上野公園、日比谷公園では全国大会も開かれました。また、尾崎は、京都や神戸など全国各地に遊説^{ゆうざい}にでかけ、普選運動を盛り上げるために、奔走しました。

1922 (大正11) 年、尾崎は、独自の立場から普選論を議会で演説したもの、普選法案^{はんせん ほうあん}は否決されました。しかし、1925 (大正14) 年の加藤高明内閣のとき、満25歳の男子に衆議院議員の選挙権を与える普通選挙法が、ついに成立したのでした。長い道のりの末に、やっと尾崎たちの運動が実ったのでした。

尾崎自身の選挙の様子は、世界でも例を見ないものでした。それは、尾崎の政治姿勢に



護憲運動の頃の尾崎行雄

- 理想をもって前向きに生きよう
- 世界に思いをはせよう

尊敬の気持ちをもつ人々の姿でした。尾崎の清廉潔白（心が清らかで欲がない）で理想を貫く強い意志を、伊勢を中心とした三重の選挙区民が感じ取り、彼を支援し続けたのです。支持者は手弁当（自費）で選挙にかかる費用を負担しあって、選挙運動を行いました。そして、当選した尾崎に金や利権を求めず、尾崎の理想や主張をよく理解し、彼を支持し続けた選挙民の心ばえもまた素晴らしいものでした。

軍国主義との闘い

もう一つの課題である軍縮にはどう取り組んだのでしょうか。その頃、日本では海軍と陸軍の費用をあわせて7億5千万円もかかっていた。これは政府の予算の半分にあたりました。イギリスやアメリカは第一次世界大戦の反動で、軍縮の機運が高まっていた。[この機に、日本が率先して軍備制限を唱えれば、イギリスやアメリカも必ず日本の考えについてくるに違いない]と、尾崎は考えました。



1923（大正12）年、尾崎は、軍備制限決議案を議会に提出しました。2時間にもおよぶ説明は、尾崎の議員生活の中で「最も力を込めたものの一つである」というほどの演説でした。しかし、この議案は大差で否決されました。尾崎はその結果に失望したものの、そんなことではへこたれず、議会でだめなら、直接世論に訴えようと考え、全国遊説に出ました。演説会では入場者にハガキを渡し、軍縮への賛否のアンケートをとったところ、賛成は9割を超えていました。

尾崎は、尾崎の政治主張に反対を唱える人たちによって、嫌がらせや妨害行為を受けることがしばしばありました。ある演説会場では、尾崎の暗殺を企てる刺客が入り込み、危うく難を逃れました。また、あるときは、宿泊先にも暴漢が押し入り、尾崎の命をもらうと、脅されることもありました。しかし、尾崎はこんなことではひるみませんでした。

1923（大正12）年の秋、アメリカは世界に呼びかけて海軍軍縮会議を提案してきました。日本もアメリカの呼びかけを無視できず、ついに海軍軍縮条約に調印しました。世界は、尾崎が提案したように、軍縮へ大きく動いたのです。

個人の幸せだけでなく 社会全体の幸福を求めて

かわむらずいけん
河村瑞賢

河村瑞賢は、今から約 400 年前に、現在の南伊勢町東宮で生まれました。13 歳の時、江戸へ旅立ちます。江戸に着いてからは、車力という仕事につきました。そして、20 歳を過ぎると材木商へと転換します。

その材木商の時、江戸で明暦の大火（1657 年）が発生し、木曾で大量の材木の買い付けに成功して、その材木を売り巨額の富を得て大商人となりました。明暦の大火後の江戸の復興には、建築請負業として活躍し、それが幕府の目にとまり御用商人となりました。

翌年の 1658（万治元）年にも大火があり、幕府の命令によって運河の掘削工事や、橋の設置工事などで江戸の町の復興に活躍し、東北地方の米や物資の搬送航路の開発依頼を幕府から受けました。それが有名な東廻り航路、西廻り航路の開発で、従来の運搬方法より効率よく、早く東北地方の米や物資が江戸に届けられるようになりました。

また、この航路の開発によって、日本海側の物資が大量に大阪の町に集まり、大阪が「天下の台所」と呼ばれるようになりました。

その後、瑞賢は淀川河口の洪水の氾濫を防ぐための治水工事である安治川の掘削工事や銀山開発などに着手し、5 代将軍綱吉にその功績が認められ、瑞賢の名声はさらに全国へ広まりました。



河村瑞賢（南伊勢町提供）

学習のめあて

河村瑞賢は、13 歳で江戸に行き、様々な職業を経験しました。その後、商人の道を選び、成功をおさめ、幕府の御用商人となるなどして活躍しました。瑞賢は、自分の仕事だけでなく、幕府から命ぜられた仕事に対しても、適切な方法を考えて行動する人物であったと伝えられています。幕府から米や物資の搬送航路の開発や治水工事を命ぜられると、心身をなげうって任せられた仕事をやりとげようとしてしました。航路の開発では、従来よりも短期間に、安全で確実に輸送ができるようになるなど経済の発展に尽くしました。

瑞賢と同時代を生きた儒学者であり、政治家であった新井白石の著書の中にも、瑞賢の業績が書かれています。また、安治川のほとりに建てられた紀功碑からも、後の時代の人々が瑞賢の業績についてどのように考えていたかを知ることができます。

大商人として成功するだけでなく、社会の発展や公共の福祉のために働こうとした瑞賢の生き方をふまえ、働くことの意味について考えてみましょう。夢や目標に向かって働くという面だけでなく、勤労や奉仕を通して社会を支えるという生き方に焦点をあてて考え、話し合ってみましょう。

考えてみよう

- 1 河村瑞賢は、どのような事業を行ったのでしょうか。
- 2 河村瑞賢は、なぜ、さまざまな事業に取り組んだのでしょうか。
- 3 河村瑞賢の行った工事を、各地の住民はどのような思いで見っていたのでしょうか。
- 4 河村瑞賢の人生は、どのような人生だったと言えるのでしょうか。
- 5 河村瑞賢の社会全体の幸福を求めた生き方について考え、話し合みましょう。
- 6 職場体験活動やボランティア活動、福祉体験活動などの経験から、働くことの意味について考えてみましょう。
- 7 自分たちの住む地域や国の発展に努めた人物について調べてみましょう。

河村瑞賢の業績

1670（寛文^{かんぶん}10）年、徳川幕府4代将軍家綱^{いえつな}の頃、河村瑞賢は東北地方の米を江戸^{えど}に運ぶ仕事を命ぜられました。

当時米を運ぶ方法としては、船か大八車^{だいはちぐるま}で運ぶかの2つに1つでしたが、船では嵐^{あらし}にありたり、座礁^{ざしょう}したりするなどの危険がつきまっています。

大八車で運ぶのは安全ですが、時間がかかりすぎたり、人手も費用もたくさんかかり、その上一度にたくさん運ぶことができません。

それで、瑞賢は、あくまで商人としての立場から、一度に多くの米が運べて、しかも、もうけの多い方法をと考えてみましたが、やはり、船しかないと判断しました。そこで、さっそく新しい大きな船を造り、腕^{うで}のよい船頭^{せんとう}を集め、船の安全な航路の調査にとりかかりました。

こうした瑞賢達の苦勞がむくわれ、船は江戸、東北間を無事に往復することができるようになりました。この航路は、東廻り^{まわ}航路と呼ばれています。

1672（寛文12）年には、東廻り航路開発の経験をもとに、西廻り航路の開発をおこないました。

この2つの航路の開発は、東北地方の米を江戸に運ぶだけでなく、日本各地の米や特産物を全国に運ぶことができるようになり、人々の生活が少しずつ変化していく大きな原因ともなりました。

瑞賢の商人としての評判は、2つの航路を開発した実績からも、どんどんあがり、多くの大名が瑞賢の計画性と判断力、そしてすぐれた才能をみこんで、先をあらそっていろいろな仕事をたのみにくるようになりました。そのような仕事の中の1つに、川の洪水を防ぐための改修工事がありました。

「南島^{なんとう}人物説本^{とくほん}」（南島町教育委員会）、ほかから作成

- 比べてみよう　きのうの自分と
- 私たちの力を社会の力に

あら い はくせき き ない ち か き
新井白石は、「畿内治河記」という本の中で、ずいけん き ない
瑞賢が畿内の水害の難を除いた功績をた
たえて、次のようなことを述べています。

「昔から水害で荒らされてきた田は、今では肥えて作物がよくできる地になった。川のほとりの人々は、はじめて苦しみからのがれ、種をまき、作物の栽培に精を出している。人々は、声をそろえて喜び合い、工事をほめる声は野に満ちている。川のほとりに住む人々の喜びだけでなく、南海・西海諸島からやってくる船も心地よく乗り入れできるようになった。誠に国家の喜びであり、人々のくらしを永久に支えることになる。昔から今までに、こんなに大きな功績をたてた人はいただろうか。」



あ じ 安治川のほとりにある紀功碑
き こう ひ

白石のことは通り、瑞賢の業績は今も生きて人々のくらしにかかわっています。大阪の人々は、その功績をたたえ、1915（大正4）年8月安治川のほとりに写真のような大きな紀功碑を建て、その偉功を偲んでいます。

「商人をこえた日本の偉人 河村瑞賢」（南島町教育委員会）から作成

郷土のためにそして、日本全国のために

おお せ とう さ く
大瀬 東 作

大瀬東作は、市町村立学校の教職員給与等の一部を国が負担する制度（義務教育費国庫負担制度）の確立に力を尽くしたため、義務教育と地方自治の先駆者といわれています。大瀬は1885（明治18）年に度会郡七保村（現大紀町）で生まれ、34歳の若さで村長の職に就きました。

当時の義務教育制度では、小学校教員給与の国の負担額はわずか、そのほとんどは町村に負わされていました。そのため、財政力の弱い町村では財政の半分以上が教育費に占められるほどでした。大瀬は、常に「義務教育の経費はすべて国家が負担するべきで、その分を公共事業や住民福祉に当てることができれば、地方が豊かになる」と考えていました。

そこで、大瀬はこの状況を打開するため、県内だけでなく全国の町村長に訴え、義務教育費国庫負担増額運動を始めました。七保村役場に全国町村会創立事務所が設置され、1921（大正10）年に全国町村会が誕生しました。

その副会長に選出された大瀬らの運動により、国の負担額は4倍に増加され、その後も全国町村会は全額国庫負担の実現に向けて運動を展開していきました。



大瀬東作 全国町村会副会長の頃
（大紀町教育委員会提供）

学習のめあて

大瀬東作は、34歳の若さで七保村（現大紀町）の村長となりました。当時の人々のくらしは、決して楽なものではありませんでした。また、村の財政も苦しく、特に教育費が大きな負担となっていました。この状況を改善するために、小学校の先生の給料を国が支払うことを求めて、大瀬は、全国で初めての運動を起こしました。

明治初期の中央集権の名残が強く残っていた時代に、地方から直接国へ声をあげることにはやさしいことではありませんでした。そのような中であって、大瀬は、精力的に動きました。県内にとどまらず、大隈重信をはじめとする中央の人々に直接会い、協力を要請しました。また、遠く北海道までも出かけ、全国の町村長に自らの考えを訴え続けました。夢の実現のためには、全国の町村が一致団結することが何よりも大切であると考え、この運動を推し進めていったのです。その結果、国が支払う額が増やされることになっていきました。

大瀬は「田畑は一年の計、山林は十年の計、教育は百年の計」ということばも残しています。将来を見通しながら、困難な課題に立ち向かい、郷土だけでなく全国の町村の財政も救おうとした大瀬の生き方について考えてみましょう。

考えてみよう

- 1 大瀬東作が村長になった頃、七保村にはどのような問題がありましたか。
- 2 「田畑は一年の計、山林は十年の計、教育は百年の計」とは、どのような意味でしょうか。また、このことばには、大瀬東作のどのような気持ちがこめられているのでしょうか。
- 3 地方の一村長が、国に立ち向かい、自らの手で問題を解決しようと決意した理由を考えてみましょう。
- 4 大瀬東作が県内だけでなく、全国の町村長に訴えたのは、どうしてでしょうか。
- 5 困難な課題に立ち向かい、郷土だけでなく全国の町村も救おうとした大瀬東作の生き方について考え、話し合みましょう。
- 6 自分たちの住む地域で、郷土の発展に関係した人物や出来事について調べてみましょう。また、その人物の生き方について考えてみましょう。

大瀬東作の決意

1919（大正8）年6月、度会郡町村会長の会議が開かれました。議題は小学校教員の給与改善でしたが、財源的に应じることは不可能に近いことでした。

大瀬東作が義務教育費国庫負担について口をきったのは、この会議においてでした。

「財源さえあれば、給与は増額できます。しかし、財源がないため何ともできません。郡長は町村の実情を知らながら、なぜ上司に窮状を訴えることをせず、町村へこの問題を押しつけるのですか。」

これに対し郡長は、

「町村の財源の基本に関する重大な問題は、私のような下級官吏がどうこうすることではない。私はただ上司の命令を伝えるのみだ。」

と答えました。大瀬は、

「郡長を責めたのは私の誤りです。ただ、今日の情勢は、一日も待ってはられません。よって、町村長の力をもって、この問題を解決します。」

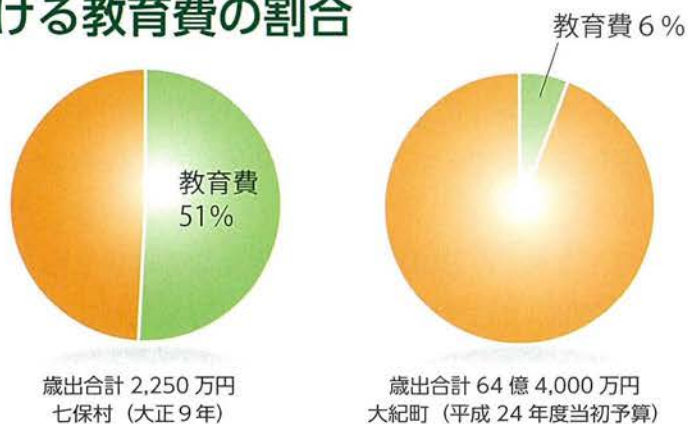
と言い切ったのでした。

温厚で慎重な大瀬が大言壮語したのは、教育に対する情熱と、この問題を何としてでも解決するという決意があったからにちがいありません。このとき、多くの町村長は賛同しましたが、一部には、誇大妄想狂だとからかい、大笑いした者もいました。「このことが決死の覚悟をもって取り組む動機となった。」と大瀬は手記に書いています。

当時の七保村は戸数560、人口3,400の寒村でした。34歳という若い村長が、教育費国庫負担実現のため、生命をかけて全国を駆け回り、ついには国の政策を動かしていくことになるのです。

出典：「大宮町人物誌」（大宮町）

歳出における教育費の割合



「大宮町人物誌」（大宮町）および「広報たいき No86」（大紀町）から作成

- 理想をもって前向きに生きよう
- 郷土をもっと好きになろう

おお せ とうさく 大瀬東作のことば

「田畑は一年の計、山林は十年の計、教育は百年の計」

大瀬東作の^{ねんぶ}年譜

年 代	事 項	日本のおもなできごと
1885 (明治 18)	・ ^{わたらい なな ほ} 度会郡七保村に生まれる	1894 日清戦争 (～ 95) 1904 日露戦争 (～ 05)
1916 (大正 4)	・七保村助役となる	大正デモクラシー 1914 第 1 次世界大戦に参戦
1918 (大正 7)	・七保村村長となる	1918 米騒動
1919 (大正 8)	・義務教育費 ^{こつこ} 国庫負担増額運動を發起する ・三重県下の町村長会を開催し、国庫負担運動を提案する ・上京し、請願 ^{ちんじょう} 陳情する	
1920 (大正 9)	・上京し、請願陳情する ・三重県町村長会を結成、副会長となる	
1921 (大正 10)	・全国町村長会を創立、副会長となる ・義務教育費国庫負担期成同盟会を結成する	
1923 (大正 12)	・七保村村長を退職する	1923 義務教育費国庫負担増額が閣議決定
1938 (昭和 13)	・亡くなる	1925 普通選挙法公布 1937 日中戦争 (～ 45)

「義務教育と地方自治の先駆者大瀬東作」(野原村元気づくり協議会)、ほかから作成

郷土の子どもたち

あなたたちは、まちの宝

地震の後の津波

志摩半島から熊野に続く海岸線に多くみられるリアス式海岸の地形は、湾が深く入り組み複雑な海岸線を形作って風光明媚ですが、一度大地震が起きると大津波の発生が予想されます。

1944（昭和19）年に発生した東南海地震（M7.9）は、熊野灘沿岸の村々にも甚大な被害をもたらしました。熊野市二木島町に住んでいる古老は、「大地震で広場に避難して海をみると、海面がどんどん退き始めほとんど水がなくなり、海底が見えるほどになった。次に海底が天ぷら油を煮立てているようになった。大人の人々が「津波が来た！」と叫んだ。一気に波が逆流し10m近い津波が押し寄せ、漁船や家屋を押し流し根こそぎ持っていった。その時、多くの人命も失われ、町は廃墟と化した」と話してくれました。そのため、この地方では、津波の恐ろしさについて、人から人、親から子へと言い伝えられており、津波に対する備えも万全です。

しかし、東南海地震から50年以上経過した今日、地震に対する警戒心が薄れてきているのも事実で、三重県に住む私たちは地震に対する対策をしっかりと取り、いざという時に備えなければなりません。



東南海地震津波到達地点碑

学習のめあて

東南海地震の規模は、マグニチュード7.9で、1923（大正12）年に発生した関東大地震とほぼ同じでした。震源は、和歌山県新宮市付近で、断層の破壊は北東に進み、浜名湖付近まで達したといわれています。この地震により大津波が発生し、高いところでは、2階建ての住宅をはるかに越えてしまうほどでした。津波による被害は甚大で、特に志摩半島から和歌山にかけての海岸部で大きくなりました。

東南海地震津波到達地点碑には森本福太郎さんの名が刻まれています。森本さんは地震発生直後に、荒坂国民学校（今の荒坂小学校）に向かいました。学校では、津波が来ることに気づいていない子どもたちが、下校のために集まっていたところでした。森本さんは、玄関まで駆け付けると、「津波が来る。子どもを逃がせ！」と、辺りにとどろく大声で叫びました。このおかげで、子どもたちは高台へ避難し、多くの命が救われたのでした。

津波が迫る中、とっさに学校へ向かい、郷土の子どもたちを救おうとした森本さんの思いについて考えてみましょう。

考えてみよう

- 1 地震が起きた後、海はどのようなようになったでしょうか。
- 2 森本さんは、どのような気持ちで人々や子どもたちを避難させたのでしょうか。
- 3 森本さんの行動について考えてみましょう。
- 4 東南海地震津波到達地点碑（森本福太郎翁顕彰碑）は、どのような目的で建てられたのでしょうか。
- 5 東南海地震津波到達地点碑（森本福太郎翁顕彰碑）には、二木島町の人々のどのような思いが込められているのでしょうか。
- 6 森本さんのように、郷土を愛し、郷土を救った人物について調べ、その生き方について考え、話し合ひましょう。
- 7 地震が起こった時、どのような行動をとればよいのか、考えてみましょう。

福太郎じいさんの叫び

しばらくして、海水の流れが速すぎるとか、潮の退いた岸壁^{がんべき}の跡や、海が濁^{にご}っているなどを見た漁師の福太郎じいさんは、異常を察知したのでしょうか。はしけの舳先^{へさき}から、先ほどよりいっそう高い声で、「津波というものが来るかわからん。高い所へ逃げよ！」と叫んだのでした。

そう言い終わると、すぐに船^{ふね}べりをスルスルと通って、真っ先に船着き^かに駆け上がり、高台へ向かう人々とは逆の方向へ駆け出しました。

福太郎じいさんが向かったのは、荒坂^{あらさか}国民学校（今の荒坂小学校）でした。学校では、子どもたちは下校のために運動場や玄関に集まり始めていました。じいさんは、玄関まで駆け付けると、「津波が来る。子どもを逃がせ！」

と、辺りにとどろく大音声でしらせたのでした。

当時5年生と6年生だった人は、その声や、福太郎じいさんの様子^{ようす}を克明^{こくめい}に覚えていました。股引^{ももひき}に手ぬぐい^{ひぬ}の捻^{ひね}りはちまきという、漁師姿であったということです。

当時、荒坂国民学校は高等科2年まであり、8学級350人の大きな学校でした。福太郎じいさんが駆け付けなかったら、すでに下校ずみの1、2年生を除いた300人の生命は、失われるところでした。



【注】学校沿革史^{えんかく}によると、昭和19年の児童数は350人とあります。当時は1、2年が午後は休みで、地震のあった時刻には、すでに帰宅していました。したがって、学校に残っていたのは、3年生から6年生と、高等科1年及び2年で、300人はいたと考えられます。

ところで、校舎が津波で流されているのに「学校沿革史」が残っているのは、このとき、先生方が必死の思いで学校の重要な文書などを避難させてくれていたからです。

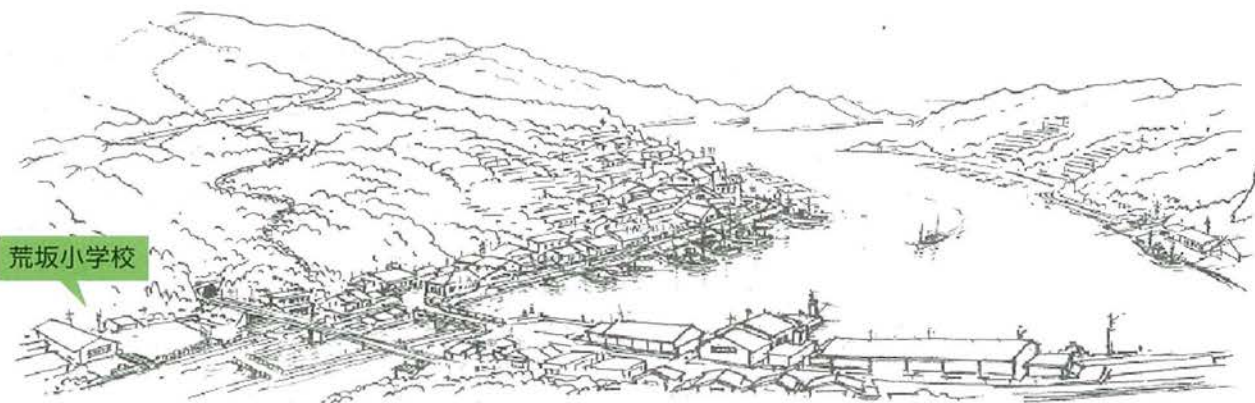
出典：「津波が来る、子どもを逃がせ！」（鈴木美文）

- 自然のすばらしさに感動できる人でありたい
- 郷土をもっと好きになろう

東南海地震津波到達地点碑^ひ

熊野市二木島町にある、東南海地震津波到達地点碑（森本福太郎翁顕彰碑）には、次のように記されています。

「昭和十九年十二月七日昼、未曾有の大津波が旧荒坂村を襲った。東南海地震大津波である。このとき、荒坂国民学校児童生徒三百人余は津波の襲来を知らぬまま、今、まさに下校にかからんとしていた。その危急を救ったのが森本福太郎翁である。翁は、自らの危険を顧みず、学校に急行すると、大音声で『津波が来る、子どもを逃がせ。』と叫び、三百人余の子どもたちを直ちに高台へ避難させた。この碑は翁の尊い働きを顕彰し、後世に語り伝えていくため、二木島町民の意志によって建立するものである。※奥地政吉さん他数名も駆け付けた。」



現在の二木島湾と二木島町

「津波が来る、子どもを逃がせ！」（鈴木美文）、ほかから作成

三重県心のノート

中学校

平成 26 年 3 月発行

発行者 三重県教育委員会

著作権所有

三重県教育委員会

〒514-8570 三重県津市広明町 13 番地

